

「図説 胃病変の診断ポイント」

常 岡 健 二 編 集

北里大学医学部内科

岡 部 治 弥

本書の内容は大きく二部に分けられている。第一部はいわば総論にあたる部で、胃病変の診断にあたってとして、1. 胃X線検査による病変のとらえ方、2. 胃内視鏡検査のあり方、3. 早期胃癌とその周辺、の3項目を2、3の図表を示し、それぞれ診断学上の重点について簡潔に説明している。ついで第二部はいわば各論で、症例と診断ポイントと題し、現在の方法論でほとんど極限にまで達した内視鏡およびX線診断によって発見されるほとんどの胃病変を1、2例ずつ、X線写真、内視鏡写真、切除標本写真と図示し、その各写真の読み方の説明とともに、いわば結論的にその疾患についての最近の概念と診断のポイントが特に枠に囲んで、実に要領よく記されている。

本書の特徴は、この枠内に記された簡潔な解説にあり、それらはこの十数年間、日本において多くのその道の研究者、すなわち内視鏡、X線、病理の各専門家によって開拓されてきたそれぞれの疾患や興味ある主題についての新知識を、多くの代表的文献を参照しつつ要領よくまとめたものである。この枠内の解説文のみをまず読んでゆくのも楽しいし、この本のひとつの読み方であるともい

える。編著者らが最も力を入れたのはおそらくここではないかと想像する。

本書の序文には、最近10年における日本の胃病変X線診断と内視鏡診断の進歩は目覚ましいものがあり、すでにそれぞれの分野の専門家による蔵書も幾つか刊行されているが、これらを総合して、しかも手短かに診断の要点を解説した入門書のようなものが必要であると考えて、この本を出版したと記してある。また、この本が胃病変診断の入門書的作用を果たし、これによって胃病変診断の厳しさと同時に楽しさが理解していただければ幸いであり、これが願いであるとむすんである。

本書の読後感をここで述べてみると、この編著者の意図は、前述の枠にかこんだ名解説によって成功していると言ってよいであろう。近年の日本における胃疾患診断学進歩の歴史をかえりみると、この10数年のめまぐるしい進歩は、名実ともに長い消化器病学の歴史の中で特筆に値するエポック・メイキングな時期であったといえる。この時期にあっても、まずから胃病変診断に従事し、その発達進歩に何らかの寄与をした人々にとっては、この好機にめぐりあった研究者としての幸福を身をもって味

わった10数年であったわけであるが、本書の編者は日本における胃内視鏡学のくさわけの第一人者であり、その後の進歩において指導的立場にあった方でもある。つぶさにその間の新知識の集積をみつめ、またみずから推進してきたわけで、それらが1つ1つの解説の中に結晶しているとしても当然であろう。

この10数年の間に、内視鏡学会の機関誌も定期的に刊行され、また胃病変診断を中心としたユニークな医学雑誌も生まれてきた。

前述の序文にもあるように、それぞれの専門家による胃病変診断学や図譜の名著も少なからず発刊されている。正に百花繚乱である。その中にあってというよりも、その成果を総合的にまとめて本書が特に入門者の指導書として出版されたわけである。今からこの方面の勉強を心ざす人のみならず、現在この道に精進している人々にも、知識の整理に役立つ本であり、これをおすすめする所以でもある。

(南江堂刊、A4、188頁、12,000円)